

京都女大家政 ○山名信子 岡部和代 相愛女短大 中野慎子
 京都文教短大 銭谷八栄子 大阪市大生活科学 三平和雄

目的 スカートの形態の研究は布のドレープ性実験によるか、あるいは着衣してヘムラインの形状を観察することによって評価する場合が多い。しかし、着衣形態はスカートの全貌を総合的に評価する必要がある、なお、その前に着衣のたびに变化する形態の再現性についても検討しなくてはならない。そこで本研究は先ずスカート形態を合理的に評価する方法を確立することを目的として、形態把握に必要な解析を統計的に行うことにより、繰り返し実験に伴う形態の再現性を検討した。

方法 人台に着衣させたタイトスカートとギャザー量の多い(ウエスト寸法×2.5)スカートの2例を用い、着衣のヒップラインとヘムライン近傍を赤外線描画機を用いて計測し、断面形状曲線を求める。各部位の断面曲線の位置を人台の中心部から放射状に測り、データ($x_1 \sim x_{36}$)によって求め、 \bar{x} および σ を計算する。次に同一部位の10回繰り返し実験を行うことにより、36個の計測点のそれぞれ95%の変動幅を求める。さらに各断面曲線毎に断面曲線のノード長にほぼ等しい長さで移動平均処理を行い、曲線をスムーズ化する。以上の処置をした曲線の変動から、曲線を再現するに妥当な実験回数を推定した。

結果 ①一般に \bar{x} はギャザースカートの方が大きい、 σ はタイトスカートの短長径比が大となるため大きくなる。②10回の繰り返し実験によるデータのばらつきは移動平均をとることにより断面曲線の形状の特徴をそこなうことなく \bar{x} 、 σ ともに小さくすることができる。③各断面曲線の再現性を±5%の精度で得るに必要な実験回数を推定すると、移動平均を施すならば殆んどどの部位は3~5回の繰り返し数で十分あらわすことができた。